

受けたことを伝える（大人の教会学校 2019.2 月）

パウロは「キリストの死と復活」について、「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです」（1コリ 15・3）と述べています。ここで「伝える」と訳されているのは、ギリシャ語の動詞パラデイドーミですが、この語は実に意味の広がりのある、興味深い言葉です。この動詞はもともと「手渡す・託す」を意味しますから、財産を「預ける」（マタイ 25・14）、権力を「任されている」（ルカ 4・6）というように用いられます。しかし、誰かをその敵対者に「手渡す」なら、それは「引き渡す・売り渡す・見放す」の意味になります。この語は、イエスを祭司長たちに引き渡したユダの裏切りを表し（マタイ 26・21、マルコ 15・10）、また迫害者であったパウロにも用いられています。ユダヤ教徒であったパウロは主イエスを信じる者を獄に「投じ」てしまいました（使徒言行録 22・4）。イエスを信じる者を獄へ「引き渡す（投じる）」者から、救いを求める人々にイエスの復活を「伝える」者へとパウロを変えたのは、イエスの呼びかけです。

パウロが「なぜわたしを迫害するのか」というイエスの呼びかけによって、その生き方を変えられたように、ペトロもイザヤも神の力に触れて、生きる方向を変えられてゆきます。ペトロは大漁の奇跡を目の当たりにしたとき、イエスに「わたしは罪深い者なのです」と告げます。日が昇ってからの大漁という常識を超えた出来事に出会ったとき、ペトロは自分の罪深さと同時に神の恵みの豊かさを知ります。神の恵みは罪深さを自覚するペトロを「人間を捕らえて生かす者」として用います。

イザヤは神殿で「高く天にある御座に主が座しておられる」のを見たとき、死の恐怖におののきました。なぜなら、イザヤもまた「汚れた唇の者、汚れた唇の民の中に住む者」だからです。しかし、セラフィムは祭壇から取った炭火でイザヤの唇を清め、咎を取り去ります。清められたイザヤは、「誰を遣わすべきか」と尋ねる神に、「わたしを遣わしてください」と答えました。人間は誰でも、不正を見てもそれに抗議することのできない「汚れた唇の者」です。清められることがなければ、不正を正す神の言葉を告げることができません。

パウロがイエスの呼びかけを聞いたように、ペトロが大漁の恵みを見たように、そしてイザヤが火で清められたように、圧倒的な神の力に出会うことがなければ、人は神の真理を見ることができません。神の真理を知ることがなければ、かつてのパウロのように神の子イエスを否定する者の側に立つ者となります。

宣教者となったパウロが懸命に働き、最も大切なこととして「伝えた」福音は、イエスの「死と復活」という人間の理解を超える途方もない恵みです。教会はこの恵みを「受けて伝える」者の集まりです。

《 年間第五主日の聖書朗読(①イザヤ 6・1～8 ②第一コリント 15・3～11 ③ルカ 5・1～11)について。「主日の聖書朗読〈C年〉」教友社 雨宮 慧 》